九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

服部英雄さんと山梨の中世史跡

萩原，三雄

https://hdl.handle.net/2324/1547322

出版情報：歴史を歩く時代を歩く ： 服部英雄退職記念誌 ： とことん服部英雄，2015-03-31．九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン：
権利関係：

服部英雄さんと山梨の中世史跡

萩原三雄

石井進先生と服部英雄さんと

服部英雄さんとのおつきあいは、そろそろ四〇年近くになる。永い間ご厚誼をいただいてきたが、そのなかでも特に印象に残っているのはやはり文化庁時代のことである。

詳しいことは忘れたが、一九七〇年代後半のことだったろう。服部さんが若き日の故石井進先生とともに山梨を訪れ、八ヶ岳南麓の中世遺跡を踏査したことがあった。あいにく天候は雪になってしまったが、それでも車にチェーンを巻きながら暗くなるまで遺跡を訪ね歩いたことが記憶に残っている。そのなかで特に服部さんが強い関心を示していたのは灌漑用水関係であった。同行者の一人であった八巻与志夫さんの案内で、暗闇の中、用水を探し求めながら熱心に記録をとっていた姿がじつに印象的であった。

八ヶ岳山麓は中世遺跡の多いところで、平安末ごろ甲斐源氏が入植した影響もあって、とくに中世城館跡などはあちこちに存在している。そのために用水の開発も活発に行われ、その痕跡が現在まで良好に残っている。服部さんはそれに強い関心を示したようで、踏査も熱心であった。ちなみに、八巻さんはそのころ学生だったような気がするが、その学問的姿勢に触発されたのか、そのあとすぐに用水と城館遺跡との関係を論文にして発表している。

この石井進先生と服部さんたちとの八ヶ岳南麓の踏査のきっかけは、たしかその当時山梨大学におられた吉田孝先生のご紹介であったようであったが、その日のホテル到着後のお二人を交えた懇親会も大変盛りあがったものであった。私自身、石井先生にお会いしたのはこの時が初めてであったし、それから先生との永いお付き合いとご指導を受けることになっていくのであるが、今改めて考えてみると、私自身の中世遺跡との永い関わりの原点もここにあるような気がしている。

勝沼氏館跡の調査研究

一九七三年（昭和四八）の一二月から甲州市勝沼町に所在している勝沼氏館跡の発掘調査が始まった。この戦国期の城館遺跡の調査はその後しばらく続き、やがて国の史跡に指定されて現在史跡公園になっているが、文化庁の担当調査官はやはり服部さんであった。私自身にとっては中世考古学との初めての出会い

がこの勝沼氏館跡の調査であったし、それから中世城館遺跡との永い付き合いが始まっていくことになるのであるが、まだ考古学の世界でも中世遺跡や城館遺跡の調査研究が始まったばかりのころで、むろん研究者層も薄く、遺跡に対する認知度も低かった。そのために出土する遺構や遺物もじつに新鮮に映り楽しい調査であった。

発掘調査とは別に、この遺跡調査に関わって覚えたものに、ワインがある。勝沼町は全国的に有名なワインの町であるから当然だが、一日の遺跡調査が終わった後は一升瓶に入ったワインを皆で飲みながら、遺跡談義をしたことも実に楽しかった。その席に服部さんもいたことがあったような気がする。

その館跡の調査成果では、多くの保存状態の良好な礎石建物が出現したのであるが、そのなかに一棟だけ特異な建物跡があった。炉を持った工房跡で、規模も割合大きい建物跡である。周囲には、水路と水溜も存在している。金属が溶解して付着しているかわらけ片も大量に見つかった。とくに、水路跡と水溜跡の中が多かった。じつはそのときは、この工房では銅などを溶解して鉄砲玉を作ったのだろうと考えたのであるが、その後、かわらけに付着していたのは、なんと金であることがわかったのである。銅ではなく金を溶解して何らかの製品を作っていたようである。しかも館の主郭の内部で行われていたのである。こうした事実が判明したのはごく最近であるが、四十数年前の調査が再び息を吹き返したようで、大変感慨深いものになった。また、歴史研究というのはスパンが長いものだと感じるとともに、遺跡が今でも地中に保存されていることに安堵感を覚えたものであった。遺跡保存の重要性もこのとき改めて実感させられた。この勝沼氏館跡の調査は服部さんの文化庁時代の初期のころのことだが、その後遺跡は整備され今日に至っている。あのときの服部さんのご指導やご協力のおかげであったと思っている。

戦国期烽火台の研究

服部さんは山登りをするだけあって健脚である。山梨県は山国であるため、標高の高い山が多く、そこにはさまざまな遺跡が存在している。そうした遺跡のうちの一つに、烽火台跡（のろしだいあと）がある。「狼煙」とも書かれるこの遺跡は文字どおり、情報伝達のために煙をあげたりする場所であった。雨天では火を燃すことはできないために、地元に残る地誌などには、鐘や太鼓を打って音で情報を伝達したと書かれている。この烽火台跡が山梨県には妙に多く、おそらく戦国時代の所産であろうと思われるのであるが、あちこちに比較的良好なかたちで残されている。

私と先に紹介した八巻さんはこれに興味をもち、この実態を調べ、連名で「どるめん」という雑誌に載せたことがあった。このレポートは、今から考えるとき

わめて稚拙な内容であったが、意外に反響があり、一定の評価もいただいた。烽火台というのは、歴史読み物の中では十分知られているものであるが、多分烽火台というものの実態を紹介したものがそれまでに少なく、新鮮であったからであろう。しかしなかには、そういう存在を認めないというような意見もいただいた気がする。それからのちに、私は『信濃』誌中に中世戦国期における烽火台の一考察というようなタイトルで論文を発表したが、服部さんはこれに目をとめていただいたようで、ご高著『景観にさぐる中世』（新人物往来社、一九九五）などの中で、引用していただいている。

ちょうどその頃だったと思うが、山梨県北杜市域の、信濃へ通じる穂坂路という街道沿いに烽火台跡が多数存在することに服部さんは着目し、この街道沿いの烽火台群を群として国の史跡にしたいというような話をされたことがあった。今では寒村地帯であるが、当時では政治上でも軍事上でも重要な幹線沿いであったこの穂坂路の村々にたくさんの烽火台が存在する。しかも、共通している点は村の近くの裏山に設置されていることである。ここに、烽火台の存在意義がみごとに示されていると服部さんは鋭く見抜いたのであろう。これらの遺跡群は残念ながら史跡には指定されなかったが、今考えると惜しかったような気がする。

御勅使川（みだいがわ）の治水施設と谷戸城跡と

甲府盆地の西部を流れる御勅使川には、戦国期に、戦国大名の武田信玄が建設したと伝えられる治水施設が存在している。「石積出し」「将棋頭」「堀切」などと呼ばれている各施設で、いずれも相互に有機的に結び付いて、治水や利水の機能を果たしているものである。文化庁時代、服部さんはこの治水施設群を史跡に指定し後世に保存しようとされ、その結果地元の熱意もあって現在では国の史跡として整備が行われている。

いつであったか正確な月日は覚えていないが、服部さんと「将棋頭」を調査した折である。たぶん、服部さんはこの「将棋頭」を初めてご覧になったのだと思うが、江戸後期の地誌である『甲斐国志』には、この施設の機能は「急流を両派にして水勢を殺ぐ」、すなわち将棋の頭のような形態をした堤防を川のなかに設置して流れを二つに分け、これによって水の勢いを半分にするというものだと書かれている。それまでの地元の人々のあいだでの見解もこの『甲斐国誌』の説を踏襲していたものであった。

しかし、服部さんはこの「将棋頭」を観察してその内側に広がる水田を眺めながら、この施設は水勢を弱めるためのものではなく、むしろ内部の水田を守るためのものであり、かつこの水田中に肥沃な泥土を引き入れる役割を果たしているものではなかったか、と即座に話されたことを今でも鮮明に覚えている。用水

や治水などに強い関心を抱いていた服部さんのこの卓見は、その後に行われていく信玄堤などの遺跡研究に多く示唆を与えることになり、かつ新たな見方による研究が行われるきっかけともなった。このあたりがたぶん、信玄堤などの研究に対する大きな転換期であったようである。

谷戸城跡も現在国史跡の指定を受け、保存整備された中世戦国期の城館遺跡である。この指定にあたって服部さんの強い熱意とご尽力もあって、その後史跡内に多数あった民有地の公有地化が着々と進められ、とくに不可能と思われていた主郭に鎮座していた神社まで移築することになった。地元の崇敬を集めた神社までも史跡外に移転させたというのは、やはり服部さんの史跡への熱い思いがあったからであろう。

服部英雄さんとの付き合いの中で教えられ、お力添えをいただいたことは、数知れない。その一端を私の地元の山梨県に限って回想してみたが、まだまだ書き足りないようである。服部さんの研究手法は、ここで改めて述べるものではないが、まさに足で稼いで歴史を語るというものである。文献史学者であるが、歴史考古学の世界を十分熟知している方でもあり、その両者の世界を駆使して研究を重ねられてきており、歴史考古学一辺倒の私からみれば、大変うらやましく思う。そういえば、彼の恩師である石井進先生の学問的研究スタイルを最もよく継承した研究者のような気がする。

九州大学を退任されるようであるが、これからもさらに精力的に活躍されることは間違いなく、これからの研究に大いにご期待申し上げるとともに、私どもに対しても引き続きご指導ご教示をいただきたいと願うしだいである。